（別紙２）　　審査の結果の要旨

論文題目　　『近世幕領支配の組織と構造』　　氏名　戸森麻衣子

本論文は、日本近世中後期の幕府直轄領（幕領）の支配構造について、出羽国村山郡や直轄都市長崎を事例として、これを担う代官や手付・手代・地役人などからなる「地域行政官僚」層の特質を中心に検討したものである。まず、序章で研究史の詳細な整理と課題設定がなされ、本論は３つの部と８つの章から構成され、最後にまとめとして終章が置かれる。

第一部「近世中後期幕僚代官所役人集団とその特質」では、出羽国村山郡幕領を素材とする二つの章からなる。そこでは、まず代官所役人の内、手付・手代層に注目し、その採用・相続などの検討を通じて、共同の利害関係を核に同職的な集団として形成される「代官所手代集団」を見いだす。また、手付・手代等の代官所役人と地域の豪農との関係を、山口村名主で郡中惣代も勤めた伊藤義左衛門関係史料から検討し、幕府支配の最前線と在地社会との接点を実態面から分析する。そして、役人集団と豪農との情報ネットワークの存在形態や、江戸の政治社会との結合関係などを論ずる。

第二部「幕領長崎の支配組織と構造」は、直轄都市長崎に置かれた幕府諸機関の全体像の解明をめざし、長崎奉行所などの各役職に見られる機能を、相互の関係をも併せて見ながら検討してゆく。まず前提として、天保改革期の長崎奉行伊沢政義を取り上げ、支配制度の改革や、地役人対策等を分析する。ついで、地役人という長崎地付きの役人集団の特異性に注目し、その多様な存在形態、本来の町人としての性格、長崎奉行所支配の下での官僚化の動向などを明らかにする。さらに、長崎代官高木作右衛門家を取り上げ、その支配域の構造や、地方支配を中心とする諸役務や身分、長崎奉行との相互関係などを見る。

続く第三部「幕領長崎の地域と社会」では、再び長崎を取り上げ、都市長崎の外縁部に広がる「郷方」三か村（長崎村・浦上村山里・浦上村淵）の社会構造や、これら郷方と長崎奉行・代官・諸藩などとの関わりを多面的に検討する。最初に、長崎の対岸にある浦上村淵を対象に、都市長崎に隣接する村の機能や百姓の役に見られる特質、九州諸藩の長崎警護体制に果たした役割などを解明する。さらに、長崎村を対象として、土地所持や住民移動などを検討して、町方と「郷方」との境界の曖昧化や、長崎との均質化などの動向を指摘する。

本論文は、史料をよく博捜し、手堅い分析を積み重ねるなど高い水準に有り、幕領支配構造論、手付・手代や地役人などの事例研究、直轄都市長崎論、などの点に於いて独創的な内容を有す成果をあげている。一部と二・三部との構成、抽出された諸概念の吟味、全体のまとめにおける論点整理などの点でいくつか改善すべき点を残すが、審査委員会は、上記のような優れた研究成果に鑑みて、論文が博士（文学）に十分値するものとの結論を得た。